

「同志社文学」と新体詩

岡 本 昌 夫

明治時代の新体詩の始まりを何れにとるかについては議論が分かれるであろうが、明治十五年の「新体詩抄」が新体詩のミニメンタルワークであることについては異論がなからう。そしてその「新体詩抄」が現われたところから新体詩運動が始まり、もろもろの詩集や詩論が現われ、文学雑誌ないし、文学に関係ある雑誌はこぞって新体詩のために若干のスペースを与えるのが常であった。当時の最も代表的な雑誌である「東洋学芸雑誌」や「国民之友」「女学雑誌」「六合雑誌」など何れもそうであった。わが「同志社文学」もまたその例外ではなかったのである。

明治十五年以後明治二十年代はまことに新体詩勃興時代といつてよからう。今は明治十四年初めて文部省から出版された「小学唱歌集初巻」を論外におき、いわゆる詩集として出版されたものを見るならば、「新体詩抄」を外にして、同じく明治十五年に出版された竹内節編になる「新体詩歌」第一、二集はさらに集を重ね、明治十九年にはそれらを合本した「新体詩歌全集」が出ている。個人の詩集としては、本誌別稿においてくわしく論ぜられる同志社の湯浅半月による「十三の石塚」（明治十八年）の他、植木枝盛の「自由詞林」（明治二十年）、大和田建樹の「詩人の春」（明治二十年）や「いさり火」（明治二十二年）、北村透谷の「楚囚之詩」（明治二十二年）などがある。明治二十二年森鷗外らによって「国民之友」に発表された「於母影」は、「新体詩抄」に次ぐミニメンタルワークであり、わが国新体詩史上の一つのピークであることは異論のないところである。明治二十四年以後はさらに優れた幾多の詩集が出

ている。中西梅花の「新体梅花詩集」や北村透谷の「蓬萊曲」は明治二十四年に出ており、明治二十六年には「湖処子詩集」、明治二十七年には大和田建樹の「歐米名家詩集」や塩井正男のスコットの「湖上の美人」の訳が出ている。「同志社文学」が出版されたのは明治二十年三月から二十八年四月までであって、まさにわが国新体詩勃興時代であったのである。

この新体詩勃興時代にはただ新体詩が作られ、詩集が多く出版されたばかりでなく、新体詩論もまた盛んに行なわれた。徳富猪一郎による「新日本の詩人」(「國民之友」、明治二十一年)佐々木弘綱の「長歌改良論」(明治二十一年)池袋清風の「新体詩批評」(「國民之友」明治二十二年)萩野由之の「和歌及び新体詩を論ず」(明治二十二年、二十五年)磯貝雲峰の「詩歌を学ぶの効用」(「女学雑誌」明治二十三年)や「国詩論」(「六合雜誌」明治二十五年、二十六年)、大和田建樹の「新体詩学」(明治二十六年)、山路愛山の「詩人論」(「國民新聞」明治二十六年)、大西祝の「詩歌論」(「青年文学」明治二十五年)や「国詩の形式に就いて」(「早稲田文学」明治二十六年)などそのおもなものである。

かような時代において満八年の長きにわたって発行された「同志社文学」は如何なる反応を示し、如何にこれに対処し、また如何にこれを批判したであろうか。また新体詩の創作及び批評に筆を取った人達が、わが国新体詩史において如何なる貢献をなし、またその業績は今日如何に評価されているであろうか。その詳細を見て行きたいと思う。

この見地に立って「同志社文学」を見て行くならば、われわれはこの月刊誌が、全巻(第一号二巻以下八十七号まで十八巻)を通じて、殆んど毎号、何らかの新体詩を登載していることに気づくのである。「同志社文学」(初め「同志社文学雑誌」と題され、後単に「文学会雑誌」と題され、又第五十四号より「同志社文学」と題された)は、大体において論説、翻訳、雑録よりなり、他に学校記事、寄書、文学会報告などを含むが、翻訳のうちには、英詩(時にドイツ詩、漢詩を

含む）を新体詩形式で翻譯したものが多く、雑録中に多くの新体詩が、漢詩、和歌とならんで相当の頁を占めるのである。同志社は元来、神学校及び英学校を主体とするものであり、外国語、殊に英語の研究を重視したのであるから、「同志社文学」に外国文学の翻譯が重要な位置を占めるのはもっともなことであった。ゴールドスミス、カーライル、シルレル、イブセン、ドストイエフスキーなどの翻譯が本誌に登載され、そのうちでもイブセンの「社会の敵」（高安三郎訳）やドストイエフスキーの「損害と侮辱と」などは本誌によって初めてわが国に紹介されたものとして、きわめて意義深いことはすでに重久篤太郎氏などによって指摘されているところである。⁽²⁾これらの翻譯のあるものは散文訳であるが、あるものは韻文を用いて、いわゆる新体詩として表現されているのである。これらの重要なものを次に列挙しておこう。

- 「村里の鍛鉄場」ロングフェロー作 望月興三郎訳（七号）
 - 「レスキウド」セリア・サキスター作 一咲生訳（九号）
 - 「葦菜の歌」ゼーン・テロル作 松雪子訳（十一号）
すみれ
 - 「月曜日」ジョン・ハルバート作 素軒逸人訳（二十四号）
 - 「若武者」シルレル作 雲峰訳（五十七号）
 - 「涙」バイロン作 雲峰訳（七十七号）
 - 「アケディヤ物語」松籟山人訳（八十七号）
 - 「此指輪」アナスタシウス・グリーン作 逆浪訳（八十七号）
- これらのあるものについては後に再び取り上げるが、何れも新体詩勃興時代に「新体詩抄」の詩人達にならって泰

西の詩歌をわが国の韻文に訳出せんとし、その形態を主として七五調によつたものである。

翻訳ならぬ創作なる新体詩を発表した人々も少くない。数において、またその詩的価値において創作詩の方が優位に立つと云つてよからう。多くは明治特有の雅号またはペンネームを用いていて、本名が明らかでないものもあるが、「同志社文学」に創作詩を発表している人の名を挙げるならば、近藤又三郎(鉄腸)、村田勤(素軒)、湯浅吉郎(半月)、橋本喜作(嘯月)、磯貝由太郎(雲峰)、納三治(明漣)、三輪源造(花景、花影)、松籟山人、菊花山人、菊水生などである。

これらの詩人のうち、磯貝雲峰と湯浅半月は、明治啓蒙期の詩人として周知の人であり、詩人全集などに必ずその作品のいくつかが収められている人である。他に橋本嘯月や松籟山人、三輪花影などは詩的才能必ずしも前二者に劣るとも思われぬが、作品全体としては、雲峰、半月に遠く及ばないのである。次にこの両詩人の業績について述べて見よう。磯貝雲峰については、すでに重久篤太郎氏が、先に言及した論文においてその略歴を紹介されているが、雲峰は明治二十六年二月から六月まで(第六十一号から六十六号までである)「同志社文学」の編集にたずさわり、少し以前から(五十四号より)名も「同志社文学」と更めて、文学色濃厚となつた。この雑誌をさらに論説よりは文学作品を重視する方向に向けて行つたのであるが、彼自身非常に文学的な志向と才能を持つ人であつた。

雲峰が初めて「同志社文学」に筆を取つたのは、その五十七号(明治二十五年九月二十日)であり、その題名は「武者」と題したシルレルの詩の訳である。これは Schiller の詩 Der Taucher. Ballade を新体詩風に訳したものであつて、二十七節に及ぶ長詩である。その初めの数節を示せば次の通りである。

其 一

『イザヤ聞かし つはものか、

若さふらひに 誰かありて、

かしの淵に しづまずや。

暗き陰府ぢの なみあれて、

黄金のさかづき 投込めば、

早くも底に 巻入るるらむ。

そを取かへる ひとありや、

あらば盃 取らせなむ。

こは勇ましき いさをしに、

わが賜ふなる 報酬なりけり』。

其 二

帝はかくぞ 云ひにける。

限りも知れぬ わだつみに、

そびゆる岩ぞ 凄かりける。

みかどは岩の たかねより、

おとすさまじき 波路にと、

持るさかづき 投入にけり。

『サテ勇ましき たけ夫等よ、

イザヤ二たび 聞けよかし。

ちひろの底に しづみても、

とり帰らずや かの益を。

其 三

若さふらひも つはものも、

帝のことは ききにけり。

されど物をも 云ははこそ。

あまたの人は もろともに、

大うなばらを ながめ居にけり。

されど進みて いさましく、

益とらむ ひとぞなき。

されば帝は こえたかく、

また三度まで 問ひけるは、

『誰かふかみに 沈み入らずや』。

右のような調子で、明治時代の一般の訳詩と変りない七五調の文語体である。

特に賞すべきほどのものではないが、二十七節の長きに亘って同じ調子にしっかりと訳している点は賞すべきであろう。雲峰はこの詩を横浜の太田温泉場において訳したが、この翻訳の事情を次のように述べている。

「此篇はシルレルの歌曲中最も有名なるものの一なり。筆力の雄壮なる、想像の巧妙なる、詩想の幽玄なる、誠にシルレルが独得の長所と云ふべきものあり。他国の言語に之を訳するは実に至難のこととす。余不文を顧みず、此の至難の文字を訳さむとせり。思ふに原詩の意を得ざる所亦少なからじ。他日折を得て訂正せむ。

原詩は一節六行、余は之を十行と改む、蓋し七五の一行を以て原詩一行の意を伝ふること難ければなり。押韻は原詩に模し、初め八行は隔行に韻を押し、終末の二行は共に一韻とす。

本篇を訳するに当り、最も困難を感じたるは海底の怪物妖魔の名なり。蓋し直訳しても我国人に恐怖の念を起さしむる能はざればなり。故に或は別に加え、或は除き、以て我国語に適する様にせり。其他或は省略せるもあり、挿入せる所もあり、一々原詩を直訳せず。一節中五行目若くは六行目及び終の行に七七若くは七六の句を作れるは単調（モノトノス）の弊に陥らざらんが為なり。

今茲七月下旬偶ま横浜に遊ぶ。同志社文学発兌の日近づけるを知り、匆卒筆を曳て訳出す。」

雲峰がこの詩をドイツ語の原詩から訳したのか、いずれかの英訳から訳したかは明らかではないが、この附言によれば、ドイツ語から訳したと解される。雲峰には他にバイロンの詩の訳もあって英語に堪能であったことは明らかだが、シラーを訳すほどのドイツ語の力もあったのかも知れない。しかし、原詩と対照して見れば、かなりひどい差があるので、雲峰自身がいうように、わが国語に適するように自由に省略あるいは挿入をしたものと考えられる。

この詩の物語はフリードリヒ大王の時代の物語といわれるが、そのねらいは、人間は神によって画された限界をの

り越えてはいけない、神をためして見たりしてはいけないということだと解されるが、こういった作者の真意を雲峰が理解していたかどうか疑わしい。しかしこの物語の表面的な筋はよく示され、一応面白く読めることを多としなければならぬ。

次に雲峰にはバイロンの「涙」なる訳詩がある（第七十七号）。先のシラーの訳よりは訳語が熟していて落ちついていられるように思われる。これは十二節に分かれているが、その初めの二節を次に抜粋して見よう。

一、 なさけもふかき ともがきに、

ものあはれを 知れるとき、

うちむかふ人のかんばせに、

まことありとも 見ゆるとき、

えくぼつくりつ ほほえみつ、

ところありげに かたるらん。

されどなさけの しるしこそ、

そのしるしこそ なみだなれ。

二、 身のいつはりも おそれをも、

ひとに見せじと うちえむを、

ところなきをば ありげにも、

よそほふひとの つねと知れ。

美にやちしく なげきなほ

あかきはちひも あらはれて

まことき調する まなごころ

しばしなみだに くるるなれ。

原詩は次のようである。

(‘The Tear’)

When Friendship or Love our sympathies move,

When Truth in a glance should appear,

The lips may beguile with a dimple or smile,

But the test of affection's a Tear.

Too oft is a smile but the hypocrite's wile,

To mark detestation or fear;

Give me the soft sigh, whilst the soul-telling eye

Is dimm'd for a time with a Tear.

感覚的に見て原詩と訳詩との間には相当のずれがあることは争えぬが、大意を巧みに把握して七五調の新体詩形にしている点は賞すべきであらう。

雲峰には他に詩数片が「同志社文学」誌上に発表されている。そのうち優れたものとして「棄婦行」(第七十六号)を挙げる事が出来る。これは詞友坂本義夫なる者が問題の詩(七十五号所載)をよせたのに対して与えたものである。雲峰の作は次の通りのものである。

一、 づらなる枝の へだてなき

えにしちきれる なかなれば、

こころのどこかに うちとけて、

たのしきゆめを むすびけり。

つがひはなれぬ あしたづの

とこよにあそぶ こちして、

よろづ代までも あだし世の、

あだなるさちを のぞみきや。

二、 はなさくあした 月のゆうべ、

ゆきのながめの たへなる日、

ふかきなさけの ことのはに、

つゆのいのちを おきてけり。

はなのかんばせ つきのまゆ、

わが身のうへは よそはねど、

三、

けがれにそまぬ　しらゆきの、

きよきころは　ありけるを。

うつろひやすき　ことのほの、

あだなるいろは　よそに見つ。

ゆきにうもれて　さくうめの、

はなのみさをを　しをりにて。

あしたのつゆを　そでにうけ、

ゆうべのしもを　身にしめて、

やがてのどかに　さくはなの、

はるにあはんと　おもひしを。

四、

さだめなき世の　さま見せて、

ゆくえも知らず　ふくかぜに、

なびきはてたる　いとやなぎ。

むすべるえにし　たえはてて、

なみにまかする　ふねのごと、

よるべなき身と　なりにけり。

いろかゆかしく　さくうめに、

たぐふころと おもひしを。

五、 あはれさちなき 身のうへの、

なれるはてこそ かなしけれ。

かわりはてたる ひとつころ、

むかしになさん よしもなし、

かくふるさとに ありし日を、

しのぶとすれば 小夜ふかみ、

ゆめもむすばぬ まくらべに、

むすぶなみだの つゆしげし。

深くちぎり合い、清い心を以て愛し合った二人であるのに、いつしか男の心は変りはてて昔に戻すよしもなく、ふるさとにあって楽しかった日を今や涙で思い起すより仕方のない棄てられた乙女の歌であるが、淡々と美しく歌い得て妙であるといえよう。ただ用いられている詩語や詩想は陳腐であり、イメージは平板であって、殊に強く人々に訴えるところがないのは遺憾である。第二節の発想といい、第三節の絃想といい何れもわが国古来の和歌の発想や絃想そのままであって何の新規さも新鮮さもない。これはひとり第二節と第三節に限らず、全節についてもいえることである。ただこういった和歌的発想に従いながら、七五調の新体詩形を新しく作り上げて行った努力を多としなければならぬ。

雲峰の作にして他に優れたものを求めるならば「一本松」(第八十五号)を挙げねばならない。この詩は一本の老

松を見て人生のあり方を思うといった詩で、そこで筆者は、人生のはかなさ、その本義、来世への願い、などを思うとともに、人生の尊さに思いをいたし、遂に神への思慕に及ぶ思想的深さを持つ詩である。言語や表現においても前の「棄婦行」より優れていると思われる。それは先ず

一、 ひまゆくこまの あしはやみ、

日もはやにしに かたふきぬ。

ひともとまつの 木のもとに、

けふものをば おもはばや。

しばしうき世を 瞑想^{なが}めばや。

二、 あはれひと木の おいまつよ、

うごかぬいはを ねぎしにて、

さためなき世を よそに見て、

このをかのべに いくちよの、

よはひを汝^なれは かさねけん。

と、単なる老松の敘述にはじまり、

八、 あはれひと木の おいまつよ、

むかしのままの みどりにて、

世のあめかぜも たへしてふ、

汝れかためしも あるものを、

ひとのいのちは、 なになるや。

と、人生とは何かの問題にふみ入り、さらに、

一〇、 いづれのとときぞ さきの世は、

いづこのくにぞ のちの世は、

無限の「とき」と もろともは、

とこしへなれと おもふこそ、

せめてもひとの ねがひなれ。

と、永世への願いが述べられている。然るに、人びとは「栄華のはなををりかぎし、浮雲のまぢを得んものと」むなしくあえぐのである。

一九、 いらあひつぐる かねのこゑ、

かれしこずゑの ゆうあらし、

かへるからすの とぶ羽おと、

いとまざびしく ひびきあひ、

そらなごりなく くれはてぬ。

二〇、 はやかへりけん 野のうしの

こゑもまこえず なりにけり。

いえちをたどる　しづの男の、

すがたも見えず　なりにけり。

のこるはほしの　ひかりにて。

この夕方の叙景はグレイの晩歌を思い出させる。雲峰は勿論「新体詩抄」を読んでいたのであろう。たとえ読んでいなくともグレイの詩を知っていたであろうことは容易に察せられ、この詩節とグレイとの関係は否定し難いであろう。ただ言葉の類似というだけではない。人生の無常と人のいのちのとうとさの思想はグレイと共通であり、思想的にもグレイの影響の下にあるといわねばなるまい。次の二節は更にこれを証するものといえるであろう。

二一、　いづれ生ひにし　野辺のくさ、

あきのあらしに　ばてずやは。

いづれあれにし　ひとの身の、

無常のかぜに　あはずやは。

始めぞをはりの　はじめなる。

二二、　いのちのひと日　くれぬ間に、

はなのあしたの　けしきにも、

つきのゆうべの　ながめにも、

まさるさかえの　ひとさかり、

ありてぞひとは　たうとかる。

あるかなきか知れぬ後の世をたのむのは、「邯鄲の蘆生」と同じくはかない限りである。ただわれらに現世を清く正しく生きることこそ重要なのである。それこそ天国であり、そこに神はいますのである。

二五、 　　ただしきみちの　　ありかこそ、

　　あまつみくにと　　云ふべけれ、

　　きよきころの　　うちこそ、

　　かみはいますと　　云ふべけれ。

　　楽土もよみも　　わが世にて。

一本の老松を前にしてかような思索に入り得た雲峰は信仰とともに、相当の詩的才能を持っていたといわねばならない。そして彼は明治二十年代の詩的世界を他の一流詩人達と共有したといえるであろう。

次に優れた詩人として注目されるのは湯浅吉郎(半月)である。明治十八年六月同志社神学科を卒業したが、その卒業式の席上朗読した新体詩「十二の石塚」については別稿に詳しく論じたが、彼は卒業後直ちにアメリカに留学し、オベリン大学においてヘブライ語や神学を修め、更にエール大学に転じて旧約聖書を学び、Ph.D.を取って明治二十四年夏帰国し、直ちに同志社教授に任ぜられて、旧約聖書を講じたが、「同志社文学」にはしばしば論文や新体詩を登載している。

彼が「同志社文学」に投じた最初の新体詩はその第五十九号によせた「同志社神学館の定礎式」と題するものであって、きわめて格調の高いものである。

モアブ山、　　峯の石碑、

鳥の跡みゆるも高し。

シロアムの池の岩岸、

もしほ草しげるも深し。

石の文字、 巖の言葉の、

残らずば、 神の民なる、

ユダヤ人建し神殿も

あれはてて、 千歳の後は、

あはれあはれ あともなきかな。

エヂプトの昔を思へ。

画や、 玉や、 鏡のみにて、

アシリヤの古しのべ。

矢や、 弓や、 太刀ばかりにて、

石の文字、 巖の言葉を、

残さずば、 神の子等なる、

やまとびと
日本人おく礎に、

苔むして、 千世経ん後は、

あはれあはれ あとやなからん。

重厚な文字と正確な七五調であるが、文字のならば方に工夫をこらしているようである。こういった儀式においてさえ、かような詩を作ることの出来た湯浅半月は、誠に詩人魂を持った人であるといわねばなるまい。

次に半月が「同志社文学」によせた詩は、「峰の墓」と題するものである。(第七十三号) これは幼にしてみまかった「光吉」なる己が子の墓を新島先生の墓所なる若王子の峰にもうけて、それに詣でた時の作である。山下、山中、山上、山墓、山歌と五部に分け、何れも七五調四行づつ三連を一部とし、みどり子を思う心の切なるをおぼえが、今はただ第四部山墓のみを引用しておこう。

いざやみよかし抱きても

我おさめつる奥つきの

土のたかまりみどり子の

ねたるすかたにみゆるなり

冬がれわたる草の床

苔むす岩の枕べに

残れる菊はねふる子の

遊びちらししかたみかも

小笹が垣はおく霜の

さゆるもしらぬ閨の戸か

散かさなれる紅葉は

かけし錦の小袵か

着想は必ずしも新奇とはいいい難いが、墓前に立って子を思う心は切なるものがある。

更に湯浅吉郎には「君が子」と題した詩がある（第七十八号）。これは「小野英二郎」が長女静子の身まかりし時よめる新体詩と説明がなされているが、己が子を失って間もなく友人の子の身まかったのを知って深く心が動いたものと思われる。この詩は五七調で、最後が七七で終っている。短いので全部を引用しよう。

時雨ふる 野辺に我子を

送りしも 昨日か今日は

君が子の ひつぎをにのふ

柳陰 五月雨さむき

鴨川の 水ものしらは

かなしからまし

みどり子の しるしの石も

たてぬまに またみどり子を

埋むとて ふたたびのぼる

峰の墓 夏草しげき

東山 雲ものしらは

かなしからまし

雲は消え 水は帰らず

世の中に とどまるものは

なけれども 河原撫子

さかずして しぼめる時の

かなしさは 我子君が子

かはらざりけり

湯浅吉郎は五七調を愛し、「十二の石塚」において終始五七調を取った。参考までにその冒頭の数行を引用すれば、

和歌の浦の磯崎こゆる

しら浪のしらぬむかしを

松陰の真砂にふして

もとむともかひやなからん

玉津島姫

久かたの天つみそのに

むれ遊ぶ聖霊の鳩の

錦翼みつばさにのらしめたまへ

我神よいさ行て見む

ユタヤの国原

の如くである。そしてこの「君が子」は、とくいの五七調を取って、各節ごとに七語の字あまりを加えた形を取り、
壮重の上にも壮重な調子となっている。

最後に「同志社文学」八十六号に湯浅吉郎は「丁汝昌」と題する一篇をよせている。丁汝昌は人も知るように日清戦争における清国の海軍提督たりし人であるが、威海衛が陥落したときわが軍門に下った。しかし彼は部下の兵士を救はんがために自らは自害し終ったのである。これを聞いた當時の人々はこれを賞し、この提督を主題として詩文を作るものが広く一般に行なわれたのである。この詩は七五調一一〇行の中篇で一応まとまっているが、傑作というほどのものではなく、特に問題にするにあたらぬと思う。

湯浅吉郎は後同志社を辞し、平安教会の牧師や、京都府立京都図書館長などをつとめたが、詩業としては、明治三十五年八月、金尾文淵堂から詩集「半月集」を出版、後「雅歌」（大正十二年警醒社刊）「箴言」（昭和十一年アルパ社刊）「予言詩イザヤ書」（昭和十四年教文館刊）等を出版し、なお多くの遺稿を残して昭和十八年死去した。⁽⁴⁾

なお磯貝雲峰は一時「同志社文学」のみならず「国民之友」「女学雑誌」などにも詩や評論を発表し、明治二十年代においては湯浅半月とともに「詩壇の双壁」といわれた。明治二十八年英文学研究の目的をもって渡米したが、病を得て帰り、明治三十年秋、東京渋谷の寓居にて三十二才の若さで没した。今日安中町外に蘇峰書になる雲峰の碑がある由である。⁽⁵⁾

以上磯貝、湯浅の両名はわが国詩史において名をとどめる人であって、今日わが近代詩の全集には必ずその代表作

のいくつかを見出すのであって、例えば「現代詩人全集」第一巻（新潮社、昭和五年）、「日本現代詩大系」第一巻（河出書房、昭和二十五年）、などを見れば明らかである。しかし、彼等の代表作が必ずしも「同志社文学」に発表されたとは限らない。磯貝雲峰の代表作「知盛卿」は「女学雑誌」（二四六号附録）に発表されたものであり、湯浅半月の「十二の石塚」は、既に述べたように、明治十八年単行本として発表されたのである。従って「同志社文学」によせられた彼等の作品は、彼等の代表作ということは出来ぬかも知れないが、彼等の詩の特色は充分に示すものであり、中には、その評価を再検討すべきものもあるのではないかと思われる。

次にこの兩名の他、「同志社文学」に新体詩をよせた人々は既にその名を挙げたように少なくないが、翻訳詩をよせた人々には、望月興三郎、村田勤（素軒逸人）、松籟山人、一咲生、松雪子などがあり、また創作詩をよせた人々には次の人々がある。主なる作品と作者を列挙すれば次の如くである。

作 品	作 者	「同志社文学」号数
馬場種太郎君を送る	近藤又三郎	第五号
負笈	鳴海漁人	第六号
悲亡友	東遊子	第八号
山村の学窓	十八山道人	第十号
古城壊古	雪のや主人	第十一号
梅花	錦岳樵人	第十二号
道芝の露	樵耕山人	第十六号

送卒業生諸君詞

山路愛山

第五十六号

田面の夕

素琴女史

第五十七号

島千鳥、新島先生記念のうた、須磨の浦風、産神祭、徳大寺実定卿、鴨緑江名残の月影

松籟山人

第六十二〜三、六十七〜八、七十二、八十二号

親睦会席上にて、福島中佐、現世、鴨緑江の月、新島先生を懐ふて

橋本嘯月

第四十九、六十三〜四、八十一、八十四号

鐘の声、撫子、悲歌、露、夜半

三輪花影

第六十八〜七十、八十二号

池袋清風大人の婚儀をことほぎてよめる

戸川残花

第八十号

秋田の義民

菊水子

第七十四〜五号

孤島の残月、野菊の露

菊花山人

第七十九、八十五号

庭の鶯

黄徴生

第八十六号

これによって見るに、先に述べた磯貝雲峰、湯浅半月の他にもかなり多数の新体詩作者がおり、その中でも、橋本嘯月、松籟山人、三輪花影の三人は殊にこの方面で活躍したといふことが出来る。これらの人々は、新しい時代になければならない。その詩形は主として七五調であり、わが国の近代詩の黎明に活躍した人々であつて、その努力を多としは思ひおよばなかつたようである。当時は「新体詩抄」によつて試みられた七五調がまだ洗練されず、七五調の完成に総ての人々が努力した時代であるから、これらの人々が、七五調ないし五七調に止まつたことを非難するわけにはゆ

くまい。わが国の新体詩が先ず七五調の完成に向っていったことについては、筆者が先に「比較文学」誌上に發表した大和田建樹論を見られたい。

さてわが国の新体詩が明治十五年以後急速に發達し次第に近代詩として定着していったことは異論のないところであるが、当時の一般の批評はむしろ新体詩に批判的であつた。新体詩に対する批難攻撃はまことにきびしいものであつた。先に挙げた池袋清風の批評の如きは代表的なものであつたが、この風潮は「同志社文学」においても見る事が出来るのである。近藤又三郎は「同志社文学」第九号及び十二号の二回にわたつて、「新体詩を難す」なる論文をよせ、新体詩をきびしく批判している。この論文は、池袋清風のような国文学者あるいは和歌の作者としてのものではなく、英学者としてのものであつて、そこには英文学の教養が現われている。彼は先ず詩の本質を次のように論じている。

「人ヲシテ其思念を高尚になさしめ、風塵の裡にありと、〔ても、か筆者〕猶ほ物質以上の事物に想ひ及はしむる者は蓋し詩の恣にする処ならん、其他、懦夫を策励し、哀者を慰め、勇者を畏懼せしめ、天上の声を人類間に及ばし、往賢先哲の行為を其律に存せしむへし、呼嗟詩人は世の預言者なりと云へるも良に故あるなり」

ところが在来の漢詩はその区域が狭く、脚色が同一轍であり、また字句が難渋であつて、人をしてその解釈に苦しむるていのものであつたから、数年前、外山正一氏が抜刀隊の歌を作つてから「新調の詩」を作るものが起り、「今日の新体詩」があるようになった。これは慶賀すべきことであるという。しかし、この新体詩には幾多の難ずべき問題があるとして四項目を挙げるのである。

その第一は、作者が余りに躁卒であり、軽卒であつて「佳句なきに驚ろく」ことである。古の詩人は一句を得るにも三年も苦吟したというのに、今の詩人は、眼に触れ耳に接することを遠慮会釈もなくこれを記して、バイロンやミ

ルトンのような詩人であると思つてゐる。かような作者先生の軽卒と大胆に驚くといふのである。

次に近藤が非難するのは新体詩の浅薄野卑なことである。彼は次のように述べる。

「寧ろ余輩は漢詩を捨てて、新体詩を採らんと欲する者なり、然りと雖、自今我国に行はるる新体詩なる者を見るに、其意匠の周到ならずして、句調の野卑なる、余輩をして、座ろに四条橋頭に阿保陀羅經を聴くが如きの感あらむ」

そして外山正一の抜刀隊の歌をもつて浅薄野卑なる見本とし、「殊に劍の山云々の一節の如きは穀棘として牛の堂下を過るが如き感なきに非ず、之を以て兵士の氣力を沮喪せざらんとするも如何にや」といふ。従來の難渋な漢詩を捨てて、泰西の詩に擬して斬新な新体の詩を研究するのは大いに喜ばしいことであるが、こういう野卑、卑俗なる詩は排すべきであると説くのである。いわゆる軍歌隆盛時代に対して一矢をむくいたものとして興味ある言葉であるといえよう。

次に近藤は新体詩の第三の欠点として、七五なる字数の制限を挙げている。新体詩作品は七五調をもつて自分達の創作の如く誇示しているが、これは古人を模倣したもので、決して新体とはいえない。古人の散文中にも多く見るところであるといつて、「生写朝顔日記」、「平仮名源平盛衰記」、「伊呂波文庫」などをあげている。一步ゆずつて、七五調を新体として認めても、七五調に拘束されるわけがわからない。むしろ七五調のわくを脱して自由に色々の調子を用いるのが詩人の役目であつて、「成るべく一定の調子のみならずして、其体の多からん事を要す」と結んでゐる。

次に第四の欠点として挙げるのは、「作者先生の意匠の高尚ならざること」である。この点は、第一の欠点と大同

小異のようであるが、第一の欠点において述べたことは、詩の外的な形態、字句を主としてその軽卒、野卑なる点を指摘したのであるが、この第四項において述べるところは、外形よりはむしろ内容、精神を主として、その言語との關係を述べたものといふことが出来る。新体詩作家が「平々易々の言語」を以てその想像するところを述べる点は大いに結構であるが、そこにはおのずから一大弊害がある。すなわち言語が野卑となり、そのため「其意匠を充分に顯す事」ができないのである。ここに用いられた「意匠」とは、詩の理念、あるいは詩想といった意味であり、アイデアであると思われる。新体詩作家は「雅言と俗語の嫌ひなく雜萃的に濫用して其胸臆を描出せんと」し、その意匠は高尚でなく、腹稿即ちメヂティションは充分ではない。「詩を美術として咏出さんとならば、實際を有の儘に読み得るの前に於て、予め其情を優美にし、其思念を高尚にし、深く詩腸を養ひ置さるへからず、詩腸を養はんと欲せば、故人の名作巧喩を反覆回誦して其想像の在る処を知り、又名山大川の間に遊び、花鳥風月に戯ること必要なるへし、斯て、故人の想像に従て、天外に逍遙し、身亦其内に在るの思をなして、後始めて自己の思念を高尚にするを得へく、天然の美景を望て後始めて、其情を優美にするを得て以て、其詩腸を養ふへし、然るに作者先生等は、此予備の必要なるを説かずして、単に有の儘々々と称するが故に、其詩常に卑近にして、空しく俗曲の中に埋死する者往々にして然り……」と論じている。誠に詩を作るには先ず「其情を優美にし、其思念を高尚にし、深く詩腸を養ひ置かねばならない」。この点を無視して、たゞ平易な言語をもってありのまゝの世界を写すことにのみ専念した当代の新体詩作者をいませめた言葉として、まことに高邁なる言といわねばならない。

以上の近藤又三郎の「新体詩を難す」なる論文はきわめて高邁な見地から新体詩を論じたものであって、決して不見識な新体詩攻撃ということではできない。詩は單なる言葉の問題でないことを力説した卓抜なる論文であり、後の新体

詩作家に頂門の一針となったであろうことは容易に感ぜられるのである。この論文が発表されたのは、明治二十一年一月と四月であって、わが国の多くの新体詩が作られる以前であり、新体詩論の現われる以前であることが注目されねばならない。先に一言した池袋清風の「新体詩批評」は明治二十二年であって、近藤の論文より一年後のものである。この論文は未完であって、更に続論が出る筈であったが、どうしたことか続きは出なかった。しかしこれだけでもわが国新体詩論争のうちの一石として取り上げる値打ちのあるものと信じるのである。今日まで池袋清風の論文は広く知られ認められているが、近藤のこの論文は世の注意を引いていないが、再考の値打ちがあるであろう。

以上「同志社文学」について、当時勃興しつつあった新体詩が如何に取り扱われ、如何なる詩人が活躍したかを論じ、また同誌にあらわれた新体詩に対する批判的な声をも紹介したのであるが、かような反応を示した「同志社文学」は、わが国近代詩の萌芽としての新体詩の發達に一掬の寄与をなしたことは争えぬ事実であるということが出来る。いな、磯貝雲峰、湯浅半月の二人などは、わが国新体詩の歴史の上に大きな足蹟を残した人であり、この二人が活躍した「同志社文学」はわが新体詩史上きわめて意義深い活動の舞台であったといつてよからう。勿論「同志社文学」は新体詩以外の分野においても大きな活躍をなしたのであって、それに比しては、新体詩における活躍はやや弱い感じもないではないが、この方面にも江湖の注意を喚起することは決して無意味ではないと思ふのである。

(1) 「新体詩批評」は「国民之友」39号及び42号の二回にわたつて、特別寄書として登載され、「新体詩抄」をまぎしく批判し、当代の新体詩一般についても国学者の立場から酷評したものである。

(2) 「主流」(同志社英文学会編) 第20号。重久篤太郎 「同志社文学と西洋文学 その一」参照。

(3) 同志社大学図書館の蔵書の中に一冊のシラーの英訳本がある。Schiller's *Poems and Plays*, tr. by Edward, Lord Lytton, M. G. Lewis, and others, London, 1889. がこれである。そしてこれには、愛山文庫なる印が押しつゝあり、雲峰の同窓山路愛山の蔵書である。

たことが明らかである。従って雲峰がこの英訳書から上記の詩を訳した可能性は多いが、断定する理由はない。

- (4) 山宮尤「書物と著者」(昭和二十四年 吾妻書房刊) 参照。
- (5) 同著九五頁以下参照。
- (6) 山路愛山はただ一回第五十六号に詩をよせているが、他には見あたらない。
- (7) 「明治翻訳史の一断面―大和田建樹を中心として」『比較文学』第四卷(1981)。